

Title	カロザスの慶應義塾に対する影響
Sub Title	Carrothers' influence on Keio gijuku
Author	會田, 倉吉 (Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.1- 31
JaLC DOI	
Abstract	C. Carrothers was the first foreign teacher at Keio Gijuku. He was appointed in June 1872 (the 5th year of Meiji) and for one year taught mainly English and English Literature to the senior students who were themselves partly teaching in the school. This article deals with the influence of Carrothers upon Keio Gijuku and its students while he was teaching here. He did not influence the school and students so far as his lectures were concerned. However, I can mention the fact that his extracurricular religious activities had a small influence upon some of the students. The greatest influence he had was in changing the system of the courses of studies. In 1874 (the 6th year of Meiji), Keio Gijuku rearranged the courses through his advice and adopted the 7-year-course system following the American educational practice. This system became the basis of the new system which, although it was amended from time to time, continued till the first semester 1897 (the 30th year of Meiji). On the character and tradition of Keio Gijuku, I can say that he had no great influence. I think this was partly because Carrothers was not a great scholar of personality and partly because of the greatness of Keio Gijuku's school character and tradition which had been begun by Yukichi Fukuzawa and which could not be changed by one single teacher.
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カロザスの慶應義塾に對する影響

會 田 倉 吉

- 一、擔當科目と受講者たち
- 二、學生への影響と感化
- 三、學科課程（正則と變則）の整備
- 四、試験法の改定、その他

一

明治の歴史は一概にこれをいうならば、およそ二百數十年の鎖國の間、世界の形勢に數等おくれをとつたわが國が、いわゆる歐米先進國の諸文物を急速にとり入れ、寸時もはやくそれらに追いつこうとした過程といつてもいいかも知れない。即ち、維新後、開國進取の氣運がにわかになかまり、殊に明治初年、わが國文物の一切は殆んどみな外國人によつていた感さえあつた。當時、時代の先端にたつて新文明の建設に大いにつくした福澤諭吉も現に代表著作の一たる「學問のすゝめ」第十編（明治七年六月出版）に、このような狀況を指摘していつている。

試に見よ、方今天下の形勢、文明は其名あれども未だ其實を見ず、外の形は備はれども内の精神は耗^{むな}し。今の我海陸軍を以て西洋諸國の兵と戦ふ可きや、決して戦ふ可らず。今の我學術を以て西洋人に教ゆ可きや、決して教ゆ可きも

のなし。却てこれを彼に學で尙其及ばざるを恐るゝのみ。外國に留學生あり、內國に雇の教師あり、政府の省、寮、學校より、諸府諸港に至るまで、大概皆外國人を雇はざるものなし。或は私立の會社學校の類と雖ども、新に事を企るものは必ず先づ外國人を雇ひ、過分の給料を與へてこれに依頼するもの多し。彼の長を取て我短を補ふとは人の口吻なれども、今の有様を見れば我は悉皆短にして彼は悉皆長なるが如し。（「福澤諭吉選集」第一卷、一六五頁）

つまり、幕末開國以後、すすんで西洋文化の攝取に意をむけ、ひたすらそれら先進諸國に伍する國力の養成を念じてきたわが國にとり、そうした外國人に教えをうけるということはまさに緊要であつた。福澤が右の引用文につづけ、

固より數百年來の鎖國を開て頓に文明の人に交ることなれば、其狀恰も火を以て水に接するが如く、此交際を平均せしめんがためには、或は彼の人物を雇ひ、或は彼の器品を買て、以て急須の缺を補ひ、水火相觸るゝの動亂を鎮靜するは必ず止を得ざるの勢なれば、一時の供給を彼に仰ぐも國の失策と云ふ可らず。（同書、一六五―一六頁）

と記しているのも、いわばかかる事情を語るものといつてよからう。そのため、外人教師というものは當時いかなる分野にあつても、つねにきわめて尊重された。そして、あたかもそのころ、慶應義塾がまたはじめて外人教師を雇入れ、教授陣を強化している（「史學」第三十卷第三號所載、拙稿「慶應義塾のカロザス雇入れについて」参照）。

もつとも、福澤の存意にしてみれば、「他國の物を仰で自國の用を便ずるは、固より永久の計に非ず」（前掲「福澤諭吉選集」第一卷、一六六頁）、世の學者たちをして「尙三五年の艱苦を忍び眞に實學を勉強して後に事に就かしめ」（同書、一六四頁）、大いに成すことあらしめて、「日本全國に分賦せる智徳に力を増し」、「西洋諸國の文明と鋒を争ふの場合」（同）の至るべきを希つていたとはいえ、そのころの實情としてはやはり義塾も外人教師の雇入れを望ましいものとしていた

といつていいのではあるまいか。

さて、その義塾が雇入れた最初の外人教師クリストファー・カロザス (Christopher Carrothers) については、その雇入れの事情やかれの経歴、人柄等に関し、すでに本誌 (『史學』第三十卷第三號、昭和三十二年十二月刊。同第四號、昭和三十三年三月刊) に、それぞれ「慶應義塾のカロザス雇入れについて」及び「カロザスの経歴と人柄」と題しかかげたところである。そこで、こんどはこのカロザスが、明治五年六月乃至翌六年七月(または六月)の約一年にわたる在職期間中、義塾に對しはたしていかなる影響感化をのこしたかにつき、いささか考察してみたいと思うが、それは大別すればつぎの二つになるといえなからうか。一つは教師としての學生に對するかれの個人的な感化と、他は學科課程など制度上における、學校への助言者としてのかれの影響とである。

このうち、第一の學生に對する個人的な感化からまずこれを取りあげてみると、はじめにかれの擔當した學科目とその受講者たちにつき一言しておく必要がある。そして、カロザスの擔當科目のことは義塾がかれを雇入れた折の契約書 (『慶應義塾五十年史』、一三〇—一二頁及び「同七十五年史」、八二頁等に所收) なり、約束書 (義塾圖書館に寫本を藏す) なりに、「英語並に文學」の教師とか講師とか、或は「英文學并科學」教師とか記されている。兩者の間に若干の相違はあるにしても、英語、英文學を教えたことは間違いない。また、約束書の「英文學并科學」というのは、別に明治五年十一月義塾が當局へ差出した「私學明細表」 (『慶應義塾七十五年史』、七五—八二頁及び「福澤諭吉傳」第一卷、七六—七七三頁等に所收) にも、教員として「英文學科學」を受持つたように書かれている。その科學なる意味が必ずしも定かでないといえはいえるけれど、同時に在職した外人教師グードマンの方は單に「英語學」とのみあつて、教授書籍も「スペ

ルリング」「リードル」類といわれるのに對し、カロザスの場合は「教授書籍概略前文同斷」即ち「修身書 經濟書 歴史 究理書 地理書 文典 リードル 數學書」となっていた。

ただに英語、英文學だけに限らず、もつとひろく多くの科目にわたつて教授することであつたようでもある。しかも、こうした文學科學の教師は雇入れに際し一定の資格、制約があつて、これらに引續き、義塾がもう一人某米人教師（チャールス・ブルーマン）を雇入れようとしたとき、そのものが學科卒業の免狀を所持しないからとて當局の許可を得られずにおわつた事實があつた（「學問のすゝめ」第六編參照）。その點、カロザスはシカゴ大學の出身でもあり、なかにはたとえかれの學力を危ぶむ向もあつたとはいへ（かれの弟子の一人原胤昭の言參照。拙稿「カロザスの經歷と人柄」に引用）、立派に文學科學の教師として通用したろうし、義塾としても相當な高給（月額一二五圓。或は一八〇金ともいう）をもつて迎えたことは前稿に述べた通りである。明治六年四月十二日附東京府宛提出の「私學慶應義塾開業願」（東京都政史料館に原本を藏す）では順序もその第三條教師履歷の項中、福澤諭吉、小幡篤次郎の次にあげられている。義塾が一應かれを學者、教育者として重んじていたことがしのべよう。

のみならず、傳えるところによれば、前記グードマンが主として上級生徒の教授にまわり、カロザスの方は専ら教師連を教える側にあつたともいう（「三田評論」第二二三號所載、須田辰次郎「余の在塾中に於ける珍談奇聞」、一〇頁及び「福澤諭吉傳」第一卷、七七九頁、「慶應義塾七十五年史」、八六頁等參照）。ただし、教師とはいつても、義塾では當時いわゆる半學半教と稱し、上級の學生は往々自から下級生を指導する立場にもあつたもので、かりに規則類をひろつてみても、明治四年につくられた「慶應義塾中之約束」（「慶應義塾五十年史」、八七頁以下、「同七十五年史」、五四頁以下、「福澤諭吉傳」第一

卷、七五四頁以下等に所收)などにさへ、

一、社中教ふる者を教授の員、或は教授方と唱へ、學ぶ者を生徒と唱ふ。故に一名の人にて、此學科を學んで、彼の學科を教ふる者は、一方より見れば、生徒にして、一方より見れば、教授方なり。(「慶應義塾五十年史」、八八頁)

といった個條が存する。したがつて、説によつては、このころからは全般によほど面目が改まり、今日のクラッスのような級の形が出来たり、教師と學生との分が或る程度定まつたりしたといふものの(「福澤先生を語る諸名士の直話」所收、「莊田平五郎直話」、一〇二―四頁)、まだまだ従前からの半學半教の風が多分に残つていたらしいから、おそらくこうした教師兼學生こそがカロザスの授業をうくべき主なる對象であつたろうかと察せられる。

たとえば、かれの教えをうけたといわれる人々のうちの幾人かをここにあげても、須田辰次郎はその懷舊談(前掲の「余の在塾中に於ける珍談奇聞」、一〇頁とか、同じく「三田評論」第二三五號所載、「義塾懷舊談」(四)、五一頁等参照)に明らかにカロザスに學んだと語っているが、かれはカロザス在職中の明治五年十一月現在、「學業勤惰表」に「第一等之一」として名を列ね、またカロザスをいたく畏敬していたと思われる加藤木重教(舊姓山崎六三)(前掲拙稿「カロザスの經歷と人柄」参照)は同様「第五等之一」に載つてゐる。そして、右の須田の談話(「三田評論」第二三二號所載、「義塾懷舊談」)によれば、明治四年前後のこと、五等以上は「教師の仲間入りをなすことあるがごとし」(同書、六四頁及び「福澤諭吉傳」第一卷、七七九頁等参照)とあるのに、このときはもう等級の制がかわつて、加藤木が教師であつた記録はみられないが、少なくとも須田は「慶應義塾五十年史」(四五九頁)に三田初期の教員としても明記されているのである。義塾が新錢座の塾舎から現在地三田に移つてきたのは明治四年のことであるから、大體この年代にあたるわけであろう。

このほか、前掲拙稿「カロザスの経歴と人柄」にかかげた濱野定四郎、高嶺秀夫、後藤牧太、朝吹英二、瀬谷鉞三郎、四屋純三郎、岩田蕃、八木澤直澄、栗本東明（舊名龜五郎）、高山紀齋（舊名彌太郎）といった人々も、濱野、後藤は義塾の新銭座時代からすでに教員となつてゐるし（「慶應義塾五十年史」、四五八頁）、後藤は前述の「私學明細表」や「私學慶應義塾開業願」にも教師としてあげられ、高嶺、瀬谷、四屋、岩田等は三田初期の教員で（同書、四五九頁）、なかなく高嶺、瀬谷、四屋、岩田、八木澤等のごとき、これまた明治五年十一月現在の「學業勤惰表」に、右の須田ともども「第一等之一」に入れられているかたわら、瀬谷、四屋、高嶺の三名が「私學明細表」に、瀬谷、岩田、高嶺、八木澤等が「私學慶應義塾開業願」にそれぞれ教師として列なつてゐた。（なお、朝吹は明治五年六月カロザス就任當時の「學業勤惰表」に「素讀出席第八等」、栗本も同じく「素讀出席第七等」とみられ、ときには教師格とまでいかないものもまつたくなかつたわけではないかも知れないが、かれらが實際にカロザスの講義をうけたかどうかはつきりしないし、後述の田中館愛橋のように等外生でありながら、課外の講義をきいた例もある。ただひとり高山だけは明治四年の勤惰表に記されながら、五年以後のものにはみあたらず、つまりそのカロザスに教えをうけたのは義塾退塾後のことなのであつた）。

二

このように、慶應義塾では主として教師または教師格の上級生たちが英語、英文學その他の講義をカロザスからきき、授業時數も契約書によると日曜日とあと二日を休日として、結局カロザスは週四日、日に三時間半ずつ講義をしたことになつてゐる（前掲拙稿「慶應義塾のカロザス雇入れについて」参照）。ここにおいて、では、そのかれがこれら學生たち

にはたしてどのような影響、感化を與えたらうか。それが當然つぎの問題になつてくることであらう。

しかるに、實をいうと、このカロザスが塾生に學業上どんな感化、影響を及ぼしたかは、いざ改まつて、それを具體的に指摘する材料がいまのところ殆んどない。かりに弟子たるべき人々の手記や談話類をさぐつてみても、授業を通してのかれの感化を述べているものはおよそ見當らないのである。もし、強いてあげるならば、オランダ流のなまりをもつたおかしな英語の發音が、かれの來任によつて多少とも是正されたことぐらいのところ、これについては恰度このとき在塾していた波多野承五郎（明治五年三月十八日入學——「入社帳」四、二丁裏）が遺稿「明治初年『慶應』の塾風」（「三田評論」第三八七號所載）に、その事實をこうしたためている。

其頃の塾の英語は、餘程變挺古であつた。それは羅馬字で綴つた英語を、文字通りに讀んだからである。例へば *People* をペオプル、*Vegetable* をベゲテブルと發音すると言ふ猛烈なものもあつた。さもなくとも、和蘭流の發音法を英語に適用して、フランクリンをフランキリンと言ひ、バターをブットルと言ふ具合であつた。畢竟、英語の教師を雇ひ入れずに、自己流の讀み方をして居たからだ。それが、明治の五年か六年か、はつきり覺えて居ないが、今の太田子爵の先代が資金を出して、米人カロザースと言ふ人を英語教師として雇ひ入れてくれたので、塾の英語は俄に發展するやうになつて來た。（同書、六頁）

「義塾は明治五年の頃迄は、唯原書の意味を取るのみ、發音杯は極めて亂暴なりしが」（「慶應義塾五十年史」、一二二頁）といわれる、いわゆる「慶應義塾流の發音」（「日本英學發達史」、二二三頁參照）がこれでいかに改められたか、想像に難くあるまい。それに、學科目についてもさらにかれはギリシャ語やラテン語の教授をすすんで行つたり、數學を正

科に加えることを主張したりしたともいう。けれども、それはいずれ後述にまつとして、もつとほかに、なにか内容のある感化をかれは塾生たちへのこきなかつたものであろうか。發音だけでは、かれの影響として論ずるのにいかにももの足りないといわねばなるまい。

そういえば、このことはまえにも一言しておいたように、ときにかれの學力を云々するものなきにしもあらずであつたし、その勤めぶりについても、人により、或は「カルザス先生に對すると親から何か教へられるやうな氣がした。何時も先生が歸る時門まで送つて行くやうになつた」(「慶應義塾基督教青年會三十年史」所收、加藤木重教「初めて聖書を見た」、四五―六頁)というほど慕われていたかと思えば、或は毎日一時から四時まで勤務すべきを他用あれば勝手に休み、俸給だけは全分とつたなどと難ぜられたりもしている(「幕末明治耶蘇教史研究」所收、「鐵炮洲六番書庫日誌」、三六六頁。拙稿「カルザスの經歷と人物」参照)。どうやら、かれが學者肌の人ではなかつたとの評(田村直臣「信仰五十年」―「明治文化」第十六卷第十號、九頁)あたりが當つているのかも知れないが、そうしたなかで、いくぶんでもはつきりいえるかれの感化をあげるならば、それは宗教上のものではなかつたろうか。嚴密にいえば、これはもとより學業上といわんよりはむしろ課外のことなわけであるが、塾生へのかれの影響としては見落すことが出來まい。ここに、序でながらすこしくそれにふれてみよう。

まず、かれに最も私淑していたかに思われる加藤木重教の談話によると、

カルザス先生は溫厚なるセントルマンで心から敬慕されて居た。而して先生は生徒に向つて神のこと又聖書に關して何も話されなかつたが、折々聖書をテーブルの上に置き授業の始まる前、一寸輕くうつむくやうであつた。私は變に

思つたが、今考へて見るとそれは黙禱であつた。(前掲「初めて聖書を見たり」、四五頁)

とあつて、カロザスは教場内では別に宗教の話をしなかつたようにいわれるが、同じころ在塾した須田辰次郎はこれを、外國教師カロザスは、元來プレスビトリアン派の宣教師なるを以て、生徒を誘ふて、自分の宗教に引き入れんとする傾ありて、始業前二三十分間、宗教に関する問答體の小冊子、アキテズムを暗記せしめて、其一冊を讀み終りし頃は、洗禮を受くることを勧め、云々(前掲「義塾懷舊談」(四)、五一頁)

と語り、どちらを信じていいのやらわからない。けれども、少なくとも授業時間外、特に日曜日などには熱心にかれは布教につくしたものと思われる。

そのことを、この日曜日の特別講義に出席した田中館愛橘は述べて、それからカロザスといふアメリカの宣教師が居つた。あれがはじめて來たところで、日曜日にバイブルの講義をして創世紀から講義をはじめ、例の罪惡を犯していけないからといふので大洪水をやつてノアが船で逃げた……。その時に門野(幾之進)先生や瀬谷(鉞三郎)先生、それから福澤先生もゐた。さうすると、いろいろな質問が出て「人間が悪いことをしたのに鳥や獸まで殺してしまふといふことはどういふ譯か」「それは鳥獸はどうせ人間のために出來たものですから、これもやる」といふことであつた。さうすると「その洪水の時に魚が死にましたか」といふ質問が出た。これに對して門野先生は「魚は死にませぬ」と日本語で答へた。兎も角さういう風にして耶蘇教の人も幾らか加はつてゐました。(「門野幾之進先生事蹟・文集」、一三六―七頁)

といい、前記加藤木もまた別の機會には、當時十名位のキリスト者が義塾にいてサンデースクール式にやつており、宣

教師の「カルサス」が常に子供たちを導こうとつとめていたと語っている（『慶應義塾基督教青年會三十年史』、二三三頁）。

その上、「鐵炮洲六番書庫日誌」には明治六年三月三十日の項に、「カルロテス」がこの日曜日から福澤の塾でバイブルの説教をはじめた、時間は午前八時から十時までで、同人の歸つての話に聴講の生徒二百六十人もあつたと得意氣に語られた旨が報じてあつて、ことによると、田中館等がその人數に含まれていたのかも知れない。しかも、福澤は「福澤諭吉傳」（第四卷、六〇頁）にも記されているように、一時外教防遏論を主張したことがあつたというものの、もともとキリスト教の主義そのものに反對したわけではなく、「例へば明治五年頃塾の語學教師をしてゐたカロザスといふ米國人は宣教師であつたので、授業の時間外に塾生に對して宗教に關する講話をなし、日曜日には教會に誘引して宗教に引入るゝことを努めなどしたが、先生（福澤）はこれに就て何ともいはれなかつた」と。そればかりか、ときに加藤木のごとく「福澤先生が基督教に餘り關はられなかつたのが残念である」（前掲書、二三三頁）と、福澤のそうした傍觀的な態度をかえつてはがゆく考へていたものもなくはなかつたにせよ、田中館の言によれば福澤は日曜日のカロザスの講釋に自から出席もしている。福澤にすれば福澤なりに、かなりカロザスの布教には好意をよせていたことになるう。

かくして、塾生中にはかれのそうした布教の影響をうけ、間々キリスト教熱にうかされるものがあらわれ、カロザスを中心としてその道にはげむにいたつた。前述の田中館や加藤木の談話からも明らかにそれはうかがえようが、わけても「慶應義塾五十年史」（一三八頁）の「(29)塾生と耶蘇教」と題する次の記事はそれをはつきり示すものといえよう。

斯くの如く、外國教師カロザー氏來りて、義塾に教鞭を取るや、氏の牧師たりし爲めか、一部の塾生即ち濱野定四

郎、高嶺秀夫、後藤牧太、朝吹英二、瀬谷鉞三郎等諸氏の如きは、多少基督教熱を催うし、日々築地に通ひて、カロザ夫妻に就き、「バイブル」の講義を聞き、讚美歌を唱ふるに至りしも、其中眞實信者とも見る可かりしは、上級生兼教師たりし瀬谷鉞三郎、高嶺秀夫の兩氏にして、之が反對者は門野幾之進、森下岩楠氏等なりしと云ふ。

たしかにかねは一部の塾生間に若干の宗教的感化を與え、ほかにも四屋純三郎などのごとき、瀬谷等と日曜日毎にカロザ宅に出入りし、バイブルの講義をきいたといわれ（前掲「初めて聖書を見たり」、四七頁、「重教七十年乃旅」前篇、五四頁等参照）、なかにはついに瀬谷鉞三郎、岩田（蕃）、八木澤（直澄）などといった受洗者をまで出したとか（前掲須田辰次郎「義塾懷舊談」（四）、五一頁）。それにつき、筆者はさきに、これは「むしろカロザスその人をしたうというよりはいわば新しいキリスト教への關心であつたのではあるまいか」（前掲拙稿「カロザスの経歴と人柄」、三七頁）といったが、それにしてこれがカロザスの來任による影響の一つであつたことは間違ひなからう。

なお、もう一度「鐵炮洲六番書庫日誌」をみれば、それはカロザスが義塾で日曜日の講義をはじめたという明治六年三月三十日の前夜から、塾生たちがかれのところに集まつて讚美歌の稽古をした事實を記し、

昨土曜日ノ夜ヨリ福澤ノ生徒教ノ歌ヲ學ブ爲「カルロテス」ノ學校ヘ集ル（前掲書、三六二頁）と述べて、引續き同年四月十一日、十二日、十八日、十九日と、義塾及び塾生に關する記事を再々載せている。

四月十一日の項——ハイフル一冊漢譯一冊福澤生間宮某求ム（同、三六七頁）

同月十二日の項——ハイフル」并ニ横文註釋漢七冊金三圓半福澤生五人ニテ求ム（同、三六七頁）

同月十八日の項——ハイフル」一冊金一圓一方（分）半福澤生求ム（同、三六八頁）

同月十九日の項——ハイフル二冊小本兩約書一部三圓一方(分)三朱福澤生求(ム)(同、三六八頁)

といった具合である。(因みに、この間宮某というのはこれよりほんの二ヶ月ばかりまえ入學した間宮喜十郎でもあろうか。喜十郎は明治六年二月十四日二十四才で入學——「入社帳」四、一六〇丁表——、間もなく沼津の名教社頭取になつて行つてゐる)。

もつとも、小澤三郎氏の紹介する謀者報告「東京邪宗事情」によると、カロザスの義塾に來る以前、はやくも明治五年正月ごろまでにかれのもとへバイブルを買いに行く塾生があつたというし(「明治文化」第十卷第十六號、一五頁)、そうすれば、塾生中の入信者はなにもカロザスが來任したためとばかりもいえまいが、カロザス就任後二ヶ月を経た同年八月朔日の、かれが築地に建てた禮拜堂の献堂式には實に二十余名の塾生が參加している(同誌所載、「東京横濱邪宗事情書」、一五頁)。カロザスが義塾に教えるようになったため塾生間のキリスト教熱が一層たかまつたことは否めないであろう。現に、その歸依者の一人加藤木重教は、これにつき、

カロザス先生は我が慶應義塾へキリスト教の種子を播かれた恩人の一人であると思ふ。(前掲「初めて聖書を見たり」、四七頁)

と斷言している。かくして、既述のごとく濱野定四郎、高嶺秀夫、後藤牧太、朝吹英二、瀬谷鉞三郎、四屋純三郎、岩田蕃、八木澤直澄、間宮喜十郎、加藤木重教等の信者をつくり、なかでも瀬谷、岩田、八木澤等は受洗するまでにいたり、加藤木も後年明治二十二年に受洗したのであつた(「慶應義塾基督教青年會三十年史」、二三三頁)。

思えば、福澤のどちらかという放任的な無干渉さに、カロザスは相當自由な布教活動を行うことが出來、その點直接の授業以外にいささか影響をのこしたものだといつてよからう。しかし、實のところはこれとても、概して「塾員の氣

風は宗教に冷淡であつて洗禮を受けたものは兩三名に過ぎなかつたといふことである」(「福澤諭吉傳」第一卷、七八〇頁)、大勢からいへばそう著しい影響ではなかつたといふべきである。それよりも、かれの義塾に對する影響として特にあぐべきは、かえつて第二の學校への助言者の立場にあつてみられた、といつておそらく差支えないのではあるまいか。即ち、義塾は明治六年學科課程(正則、變則)の整備を行つてゐるが、これこそがかれの意見によつたものなのであつた。

三

現在までに刊行されている慶應義塾の歴史類をみると、その五十年史(明治四十年四月二十一日刊)、一二二頁以下に「(27)義塾正則變則の起源」なる項があつて、そこに正則科と變則科のそれぞれの課程表がかかげられ、さらに七十五年史(昭和七年五月九日刊)では八七頁以下に、兩科の教則全般までが載つてゐる。(ただし、後者は明治六年四月東京府宛の「私學慶應義塾開業願」に記された制定當時のものであるのに、前者の表はのちに改定されたものらしい)。

カロザスによつて整備された學科課程というのはほかならぬこれで、そのことにつき右の五十年史(一二二頁)は、義塾は明治五年の頃迄は、唯原書の意味を取るのみ、發音杯は極めて亂暴なりしが、同年よりは華族太田資美氏の出金にて米人カロザー氏を雇入れ、同人に托して、學科の仕組をば、左記の如く、總て米國「カレッジ」風に改め云々と報じ、同じく七十五年史(八六頁)には、

カロザス氏はシカゴ大學の卒業生でプレセプテリアン派の宣教師として日本に來てゐた人で、塾に於ては専ら教師連を教へてゐたのであるが、從來の塾の教授が専ら英書の解讀を主として其方法順序等が甚だ不規則であるのを見て、

正則の學科課程を定むべきことを主張したので、塾に於ては其意見を參考として始めてアメリカの中學の制度に倣つた七箇年制の課程を定め、別に年長者で英語を學びたいといふ者のために専ら英書の解讀の力を養成せしめることを主眼とした變則科なるものを設けた。

と述べられている。

明治五年新らしく雇入れた外人教師カロザスの意見に基づき、義塾はこのとき教則を改定して勉學の順序をたて、修業年限七箇年制の正則課程をつくつたわけで、別に、これまで通り専ら英書の讀解力を養い、ひたすら學業の速成を期する變則科をもあわせおいたのであつた。なお、當時正則、變則というと、ややもすれば從來等閑視されていたきらいのある英語の發音をただすのを正則と呼び、むかしながらのオランダ流のなまりをのこす式の無頓着な發音のものを變則英語と稱していたようでもあるが、義塾における正則、變則はそれとは若干趣を異にし、むしろ眼目は既述の通り修學の順序にかかわり、明治六年これが實施にあたつて趣旨説明のため書かれた福澤諭吉の草稿「慶應義塾教則變更に關する告示」(『續福澤全集』第七卷、七八—八〇頁)にも、明らかに「世間にてはこの變正の義を誤り唯音を正すものを正則音を正さざるものを變則と思ふ者もあらん乎誤謬の大なるものなり音の正しきものにて變則あり音の正しからざるのみならず日本の書を横文と並用ひても正則あるなり」(同書、七九頁)とある。

しかし、もちろんこうした外人教師の教授により、これまでの英語の發音がいくぶんでも是正されたことは前記五十年史の引用文からも察せられようし、すでに前節にも明記したところであるが、それよりも、實はこんどの義塾教則變更の本旨とするところは、

方今學問の道漸く開け世の士君子其子弟を教へんとする者多ければ少年の爲更に學風を改め教則を設けざるべからず其法は全く西洋學校の風に倣て其眞面目を寫し兒童をして十歳前後の時より本則の學科に就かしめ唯横文のみならず日本の文をも學ばしめて七八年の間に大成を期するものなり或はこゝに學ぶこと半にして西洋に遊學することあるも唯全璧の半を缺くのみなれば續て彼學校に入るも嘗て學びし所のものを棄るに非ずして唯これを潤色するを得べし此學問の法を正則と名くべき乎云々（前掲「慶應義塾教則變更に關する告示」、七九頁）

という次第で、「此度我義塾を二に分ち一を本校とし正則の教を設け一を分校と名け變則の教を設ることに決議せり受教の社中は自己の年齢と其身の有様とを熟考し或はこれを父兄に謀りて何れの校に就くべき乎其進退を決すべし」（同）と、正、變いずれをえらぶべきかをそこにせまつてゐる。

一方、この正則に對する變則は、

廣く西洋の書を読み或はこれを口に講じ或はこれを書に譯して彼の文明の風を速に世に傳へ以て國力を増さんとするに急なれば西洋の學校に行はるゝ學問の順序を顧るに遑あらず先づ其文典を読み直に地理書を學ぶ者あり經濟論を講ずる者あり唯本國の時勢を察して其急務に供するのみ其趣恰も儒者の漢書を読むが如し教授の順序に拘はらずして急成を主とするものなり今の所謂洋學者は大概皆是なりこれを變則とも名く可き乎（同、七八―九頁）

とて、「凡天下の讀書生年齢二十二三を過ぎ其才氣既に發生したる者は必ず此變則に由らざるべからず其學問不規則なりと雖も三五年の勉強を以て業を成し世教に益あること舉て云ふべから」（同、七九頁）ざるものがあつた。けれども、とかくこの「變則より洋學に入りたる者は學問の順序を経ざるゆへ一に明なるも二を知らず西洋にては十歳の童子も暗

誦する事柄に遭ふて其辨解に困却すること少からず故に此輩の人は今日の用を達するには有力なるも眞にこれを目して學者と云ふべからず」(同)、「されば今些々たる差支を以て正則を恐れ枉て變則に就き我輩自家の無則の教を學ぶは或はこれ無勇姑息ともいふべきなり故に此度規則に十七歳以下の者は分校に入るを許さず或は十七歳以上の者も僅に學資を備へ勉強の意あらん者は本校の學に就くべきなれ」(同、八〇頁)と、結局は正則科に入ることがすすめられたのであつた。

因みに、このような正則、變則の制度というものは、義塾のそれにすこしく先んじ、明治三年閏十月定められた大學南校や同東校の規則のなかにも、或は「正則生ハ教師ニ從ヒ韻學會話ヨリ始メ變則生ハ訓讀解意ヲ主トシ」(「東京帝國大學五十年史」上、一三四頁、「大學南校規則」第七條)たといひ、或は「正則生ハ洋書ヲ讀ミ學科ノ順序ヲ遂ヒ卒業大成スルヲ要ス變則生ハ譯書ニ憑リ每學科ノ要領ヲ得早ク成業スルヲ旨トス可キ事」(同書、三六五頁、「大學東校規則」第六條)とうかがわれ、かつ正則とは外國教師につき外國語をもつて教授をうけ、變則は邦人教師から學んだものと説かれていて、義塾の場合と一脈相通するふしもみられよう。したがつて、必ずしもカロザスの來任がなかつたとしても、義塾としても早晩こうした正則科の制定がすすめられる氣運にあつたかも知れないが、それがカロザスの意見に基づき、アメリカのカレッジ風を模する七年制正則課程として實現したことは、ここにみとめられねばなるまい。

さて、このようにして出來た新しい教則と學科課程は全文を本稿末にかかげようが、中山一義教授の御教示によると、それは當時ようやく整備されてまさに隆昌期にあつたとみられる「ハイ・スクール」(High school)を模したものとわれ、つとに實學を主唱してきた義塾として興味ある事實といえよう。「ハイ・スクール」は十九世紀のはじめに

主としてアメリカにおこつたが、いわば貴族的な特定教育を目的としたかつての「ラテン・グラマー・スクール」(Latin grammar school)からすこしでも實際的な近代的學科目を採用した「アカデミー」(Academy)を経、さらに一層實學的要素を加味した新興のもので、恰度このころそれが一定の型をつくりあげていたという。義塾のこのたびの學科課程がそこに範をとつたというのは意味のないことではあるまい。(カロザスがオハイオ州の出身であり、シカゴ大學に學んでゐることからすれば、そのあたりの實例をさがすともつと具體的な手本がみつかるかも知れないが、いまはその余裕がない)。

とにかく、こうしてこのカロザスに「米國のカレッジの課程に準じたる學科課程を作らしめ、之を參考として」(「三田評論」第二二九號所載、後藤牧太「義塾懷舊談」、四六頁)ここに義塾の新らしい學科目が定められ、しかも、それが「塾の一大進歩」をきたしたといわれる。ただ、これにより學生たちの費用の負擔の増大はさけ難かつた。なんでも、前記加藤木の自傳(「重教七十年乃旅」前篇、四九―五〇頁)を讀むと、明治六年三月義塾學則の一大變革に關する揭示が大講堂の壁に長々とはり出され、それに基づき月謝その他の費用が大いに増加し、それまでの藩からの給費では足りなくなつたため止むなく退學するにいたつたといひ、同じく塾生の一人であつた田中館愛橘もかれの入學(明治五年九月二十六日「入社帳」四、八七丁表)後一年ほどたつてからこの塾則改定があり、「正則のものは月謝が高くなつた。それで私は折角來たけれども正則をやると三圓いくらになるので、とてもやりきれない。それで文部省の學校に行けば五十錢で正則が出来る。そんな譯で一年ばかり慶應義塾に居つて文部省の學校に行つた」(「門野幾之進先生事蹟・文集」、一三七頁)と語つてゐる。これはこんどの學制改革による一つのはからざる餘響であつたかも知れない。それに、大學東校の規則には正則五年とあるのが義塾の正則は七年制で、豫備等三年、本等四年となつてゐた。

それかあらぬか、明治六年七月カロザスの退任と殆んど同時に福澤は甥中上川彦次郎に宛てた書翰（七月三十日附、「續福澤全集」第六卷、四一六頁所收、「史學」第二十九卷第一號所載、拙稿「カロザスに言及せる或る福澤書翰について」参照）のなかで、「尙九月よりは變則に少しく力を増し候様致度積りなり」といつている。これは一體なにを意味するのであるか。もとより、正則をどうするというわけでは決してあるまいが、加藤木、田中館の場合のみに止まらず、この正則に學び得ない例はほかにもあつたかも知れないし、福澤がいくら一流の懇切な告示をにかけて正則の必要を説いてみても、まだ世間一般の實情はなお變則による速成を望む向が少なくなかつたともいえるのではあるまいか。それとこれに關連してもう一つ留意さるべきは、明治六年夏アーマスト大學のシーリー、ヒッチコック兩教授が來塾し學科、教科書等に注意を與えていつたという事實であろう（「慶應義塾五十年史」、五二九頁）。アーマスト大學といえ、わが國における二大キリスト者たる新島襄、内村鑑三の學んだところ、兩教授の來塾とそれによる變化ということが當然考えられなければなるまいが、遺憾ながらそれははつきりしたことがわからない。ここでいえることは、カロザスの學科課程がどちらかといえばあまりにも翻譯的で、やや實情にそわぬふしもなかつたとはいいいきれない事實ではなからうか。やがて漸々それは修正されているようである。

しかし、なんにしても、「是れ抑も其後正科別科と改稱して、明治三十年第一學期まで繼續せし、學制の起源に外ならず」（「慶應義塾五十年史」、一二三頁）、「正則を本科と改稱し又正科と改め、變則を豫備科、又別科と改稱するなど、數次の小改革を経て學科課程も漸次高くなり、單なる中學校ではなく、一種の高等教育の機關となつた」（「慶應義塾七十五年史」、一七七頁）が、その基礎は實にここにきずかれたのであつた、といつてあえて過言ではあるまい。

四

右のほか、カロザスの義塾にのこした影響はまだ直接、間接にいろいろとあつた。たとえば、前掲の須田辰次郎懷舊談（「余の在塾中に於ける珍談奇聞」）に、

所で慶應義塾は既に大學以上に心得て居つたのでありますが、世界的の大學となるには、其教科目中に羅典語が入つて居らなければならぬと云ふので、私共も一年程の間羅典語の文典を暗記させられ、大に閉口致しましたが、併し其お蔭でウールシーのインターナショナル・ローにあります位の羅典語は、どうやら斯うやら字書に依り讀める位になりました。（「三田評論」第二二三號、一〇頁）

とある、ラテン語の教授など學科目に關するものがその一つで、これにつき「福澤諭吉傳」（第一卷、七七九頁）はさらに、カロザスは義塾が世界的の大學を以て自から期する以上は、其教科中にラテン、グリーキの語學がなくてはならぬといふて、教師連中にそれを教ふることになつた。又從來數學は隨意科であつたのを、これ亦同人の主張で學科中に加ふることにした云々と記している。

もつとも、數學は門野幾之進の談話（「福澤先生を語る諸名士の直話」所收、「門野幾之進直話」、一四三頁）によると、明治四年義塾が三田に移るすこし前からはじめられ、海軍省内の數學の出來る人を雇つて教授し、そのため、もとは英書を読むだけの主眼としていたのがいくらかでも學校らしくなつたといひ、明治二年再版の「慶應義塾之記」にも明らかに「一、

算術稽古 荒井岩次郎「慶應義塾五十年史」、五六頁及び「同七十五年史」、三九頁等参照）とあつて、カロザス以前といえどもそれが決してなかつたわけではない。これまでは隨意科であつたのをかれの主張で正規の學科中に加えたというだけなのであるが、それでも「學生等は算術の如きは刀筆の吏のする事で吾々の學ぶべきものでないといつて大に不平を唱へて反對したが、先生（福澤）はこれを聞き、それがいやなら出て行つて貰ふより仕方がないといはれたので、反對論も忽ち立消えとなつた」（「福澤諭吉傳」第一卷、七八〇頁）という。

それから、かれの影響とみられるもう一つに試験法の改正があり、カロザス招聘以後それまでの口頭試験を、學科により今日のような筆記試験にすることになつたといわれ、「慶應義塾五十年史」（一二〇頁）はそれを「明治五年以前に於ける試験法」と題し、

明治五年米人カロザー氏を聘して、義塾の學科を改良以後の試験法は、學科に依りては、矢張り今日の如く、筆記試験を用ふるに至りしも、是より以前の試験法は、總て口答試験なり云々（頭）

と記している。これだけでは、それが必ずしもカロザスの意向で行われたものか否か、明言されてはいないけれども、かれが來任してから實施されるようになったことはたしかにうかがわれよう。たとえ直接ではないまでも間接的に影響のあつたことは間違ひあるまい。（しかも、末尾にかかげる教則をみると、この試験は毎月末、毎期末、每年末にあつたらしい）。

また、間接的な影響とみられるものには、このほかにも後年の留學生の派遣とか、その他黑板やストープなどの設備やら、日曜休日の設定やらがあれこれとあげられる。そのうち、義塾が派遣した留學生というのはそもそも明治三十二年八月を第一回とするのであるが、「門野幾之進先生事蹟・文集」（二七八―九頁）を繙くと、義塾のそれに關する門野

の談話として、

「さうです。尤もその以前に池田成彬君とその弟がハーバード大學のスコラシップをもつて留學したことがある。それはカロザスの來た時以來、塾からも留學生を出すやうにしないでといふことであつたからで、又池田君は別に將來塾の教師になるといふ條件でもなかつたけれども、塾で先方と交渉して出したのです。（中略）海外留學生派遣の一番最初といへば、趣旨は少し違ふけれどもこれでせうネ」

と語られている。この池田の留學は明治二十三年、もとより年代もあまりに隔たり、趣旨にも必ずしも同一ならざるものがあつたようであるが、これがカロザスのとき以來の懸案であつたというわけである。特にカロザスのすすめがなかつたにしても、直接外人に接するようになって、その必要が痛感されていたともみられはしまいか。

ついで、黑板やストーブの設備のことは、これも須田辰次郎の「義塾懷舊談」(二)(「三田評論」第二三三號、四一二頁)に、こんな風に語られている。

明治五年外國人を教師に雇ひ始め教室に黑板を備へストーブを置くに至りて石炭をくべるの必要上より專任の塾僕を雇ひ教室の掃除をもなさしめたり。

いわば、外人教師雇入れの餘響がこんなところまで及び、わけでも日曜日を休日とする問題は全くかれらの便宜のために定められたもので、須田の懷舊談はそれをまたこういつている。

新錢座時代より三田移轉當座休日は月六度にて一六の日なり是れ塾に限らず諸官省も當時皆一六休暇にて之をドンタクと唱へ、唯外國人を雇へる大學南校の如きは日曜休日なり。義塾も外國人の教師を雇入れてより日曜休暇となり

たれば月六度の休日が四度に減ずるを以て土曜日を半休となして之を償ひたる次第なるが世間にて慶應義塾は耶蘇教化したりとて種々の噂もありたり。(同書、四二頁)

即ち、義塾はつとに新錢座時代、一時日曜休日の制をとつていたことがあり、當時の日課表(「慶應義塾之記」所收)でもそれが明らかにうかがわれるが、やがて一般の例にならつて一六の日を休日としたところ、外國人を雇入れたため再び日曜休日を採用するにいたつたもので(「福澤諭吉傳」第一卷、七五八頁參照)、このことは外國人を雇うところではしばしばみられた措置であつた。右の文中にある大學南校のごときはたしかにその一つで、前掲の明治三年閏十月制定された同校の規則にも、天長節をはじめ節朔と日曜日とを休日とすることにきめ、ただし日曜日は「外國教師雇入ヲ止ムル後ハ一六ヲ以テ休業トスベシ」とみられ、同東校規則では天長節、七節と毎月一六の日を休日とし、「外國教師在校中ハ日曜日朔ヲ以テ休日トス」とある。義塾がはじめて外國人を雇入れたのが明治五年であつたから、そのときから日曜日を休日としたのはこれらと趣をとにもするものといえよう。そして、文部省が省令をもつて官立學校の休日を改め、從來の一六の日から日曜日としたのが明治七年三月のことであり、さらに官廳の休日というものが日曜日に一定されたのが明治九年三月の太政官達第二十七號(「法令全書」、明治九年、二九一頁)によるのを思えば、義塾の日曜休日採用はなにも耶蘇教かぶれしたわけではなくとも、實施のはやい方であつたことになる。ただ、これをいま明治六年改定の教則にあたつてみると、日曜日は平日の業は休むけれども午前中修身講話のようなものがあつて、これに出ないものは即刻退社させるとあり、その代りでもあろうか、毎土曜日と二祝日(神武天皇即位日と天長節)とが本當の休業となつてゐる。この點、右の須田談といささかくい違いがないが、それは規則がこの前後に變更されているためであらう

か。また、これからすると、既記のカロザスの課外講義なども或はその日曜講話の一部でもあつたものか。そうすると、義塾の耶蘇教化云々の噂もまんざらうなづけなくもないようであるが、大勢においてそうでなかつたことは前述の通りである。それに、實は明治九年四月以降政府の日曜休日實施に際しても、福澤はそれがややもすれば社會の實情にそわないふしのあるのを指摘しているくらいであるから（「覺書」―「福澤諭吉選集」第一卷、二四四頁）、この義塾の日曜休日採用は明らかに外人教師雇入れによる便法であつたとみられよう。

以上のごとく、カロザスの雇入れは時勢の動きにも一應對處し得たことになり、「從來塾の教授法は、原書を譯讀して其意味を取ることを専らとしたが、此頃から外國教師を雇入れ英語によつて學科を授くるの端を開き」（「福澤諭吉傳」第一卷、七七九頁）、かつ學科課程の整備その他諸制度にわたつても種々變革改善をもたらした。その結果、義塾の聲價が一層たかまるにいたつたことはかれの在職したころやはり教員の一人であつた門野幾之進も語つて、後年こういつてゐる。

明治四五年頃と思ひますが、米國の宣教師でカロザルスと云ふ人を雇入れ、夫れから英語で物を教へることになつたのであります。正則に英語を教授すると云ふので、慶應義塾が世間に知られしのみならず、此人が米國のカレッヂの規則に據つて、學則を拵へましたので、初めて學校風の教則が出来たやうな次第でありましたが、此人は明治六年頃まで居たやうでした。（「福澤先生を語る」諸名士の直話所收、「門野幾之進直話」、一四三頁）

ところが、それにも拘わらず、このカロザスが一人の教師として塾生たちに及ぼした感化、影響は如何というと、わずかに宗教上にそれをうかがわれる程度で、義塾全體としてはあまり大きな影響をのこし得なかつたものではあるまい

か。そして、その人となりややもすれば粗野な面がなくもなかつたとはいえ、それだけかなり實行力のあつたことも否めないのであるが、それは必ずしも教育者としてのかれの能力、指導者としてのかれの資質を示すものではなかつたのであろう。カロザスが義塾に教鞭をとつたのはかれの三十代という最も壯年のとき——それもわが國におけるかれの布教活動上、いわば最も活潑な時期にあたつていた（前掲拙稿「慶應義塾のカロザス雇入れについて」及び「カロザスの経歴と人柄」等参照）。かくて、その間かれは「英語並に英文學」または「英文學并科學」を教えるかたわら、一年の在職中に、學科課程の改定その他一通りの業績をよくのこした。けれども、學問的影響とか人格的感化とかの點では殆んどこれといったものをのこし得なかつた、と結論的にいつていいのではあるまいか。ただ、それが義塾にとつての利害は自から別の問題で、これが一つにはカロザスの學力、資質によるのかも知れないが、一つには福澤によつて打ちたてられ培われた義塾の學風、傳統がかれ一人の來任ぐらいでは容易に左右される態のものでなかつたともいえよう。

〔參考〕

明治六年制定の慶應義塾教則（東京都政史料館藏、明治六年四月十二日附東京府宛提出の「私學慶應義塾開業願」による）

教 則

一 教授ノ法ヲ正則ト變則ト二様ニ分チ其規則左ノ如シ

正 則 科

- 一 學業ノ年數ヲ七年ト爲ス内三年ヲ豫備等トシ四年ヲ本等トス
- 一 一年ヲ分テ三期ト爲ス第一期ハ八月下旬ニ始リ十二月下旬ニ終リ十七週日第二期ハ一月上旬ニ始リ四月中旬ニ終リ十四週日第三期ハ四月下旬ニ始リ七月下旬ニ終リ又十四週日ナリ

一 停業時ハ第一期ト第二期ノ間二週日第二期ト第三期ノ間一週日第三期終リテ後四週日トス
一 休業ハ毎土曜日及二祝日トス

一 此學校ニテ豫備等ニ入ルハ滿十三歳以上ノモノタルベシ

一 豫備等ニ入ルハ必ス後ニ出セル科業表等外ノ業終リタル者ニ限ル

一 學業ハ都テ順序ヲ逐ヒ定課ニ就クヲ法トス定課ノ外業ニ就クヲ許サス但シ教師ヲ許ヲ得テ下ノ級ニ出ルハ例外ナリ

一 教師ハ毎日稽古前ニ生徒ノ出席ヲ表ニ記シ直ニ業ヲ始ムベシ若シ生徒稽古時限ニ後レ出席スル者アラハ半席ノ印ヲ付ケテ一席ノ數ニ充ヘカラス

一 教師ハ生徒ノ諳誦ヲ聞其甲乙ヲ定ム

一 等外教師ノ法プライマリー、リードル、及第一リードル、ハ諳誦セシムルヲナク素讀ノミヲ傳ヘ時々盤上ニ既ニ讀タル語ヲ記シテ其譯ヲ答ヘシメ或ハ譯ヲ記シテ英語ヲ答ヘシムル等都テ生徒ニ英語ノ譯ヲ覺ヘシムルヲ主旨トシ第二リードル、ニ至リテハ講義ヲ爲シ或ハ時々生徒ニモ讀マシメ英書ノ讀方ヲ知ラシムルヲ要スプライマリー文典、中等地理書、究理初歩ハ今日講釋シテ明日コレヲ暗誦セシム數學プライマリー、ノ間ハ勘定稽古ヲ重モニ教ヘ、ロシメント、ニ至リテハ業及義理ヲモ精シク理解セシムベシ

一 豫備等ノ教授ハ、リードル、ヲ講釋シテ時々生徒ニモ讀マシメ諸歴史、究理書ハ今日講釋シテ明日生徒ニ暗誦セシメ其他ハ皆講釋スルヲナク唯暗誦セシムルノミ數學ハ規則等ヲ暗誦セシメ業ハ生徒ヲシテ順番ニ盤上ニ記サシメ他ノ生徒ヲシテ其當否ヲ論セシムベシ

一 本等ノ教授ハ全ク講義ヲ用ルヲナク唯日々生徒ヲシテ暗誦セシムルノミ

一 生徒ハ必ス稽古時限ノ五分前講堂ヘ出席シ位置ヲ正シクシテ教師ノ出席ヲ待ツヘシ稽古ノ間ハ必ス其席ヲ去ルベカラス

一 毎日受業ノ書ヲ暗記シテ教師ノ問ニ答フベシ假令自身ノ番ニ非ルモ能心ヲ用ヒテ他人ノ答ヲ聞、務メテ讀タル書ヲ忘レザル様心掛ヘシ

一 リードル、ハ都テ暗誦スルヲナク唯讀方解シ方ヲ會得スルヲ主トス

一 カロザスの慶應義塾に對する影響

一 毎月末其月中讀タル部分ノ吟味ヲ爲スベシ

一 各期末其期中ニ讀タル部分ノ吟味ヲ爲スベシ

一 毎年第三期末前年中讀タル書ノ大試業ヲ爲シ記憶^(億)宜シカラサル者ハ級ヲ進メス再度同級ノ業ヲ受ケシムベシ

一 毎日曜日ニハ平日ノ業ヲ休ミ朝第八時ヨリ第十時迄ノ間都テノ生徒ニ修身ノ道ヲ教授ス此教授ニ缺席スル者アラバ直ニ退社セシム

一 ベシ但シ去リガタキ故障アリテ缺席スルモノハ必ス其用事ノ趣ヲ精シク記シタル書付ヲ校務掛ニ出シ其許可ヲ受クベシ^(教)

一 生徒故アリテ定課ノ内一二ノ業ヲ缺ヲ願フトキハ必ス其父兄或ハ證人ヨリ差支ノ趣ヲ精シク斷リ其上ニテ生徒ノ年齢及其缺ント欲スル業ニヨリテハ望ニ任スベシ此類ノ人ハ格外ノ生徒ト名テ定級ノ外ニ置クベシ

一 元來書生トナリテ學問セント欲スル者ハ公私ノ用事ナキ管ナル故ニ自身ノ病氣又ハ父母兄弟ノ病氣等止ムヲ得サル事故アルニ非サレハ缺席ヲ許サス若シ此類ノ事アリテ缺席スルヲアラバ必ス精シク其用向ヲ教師ニ告クヘシ格別ノ故障ナクシテ缺席スルモノハ其日ノ間ニ答フル能ハサルモノト視做シ度々缺席セハ執事相談ノ上退學セシムヘシ

一 既ニ他ノ學校ニテ學ヒタル者入學スルヲアラハ吟味ノ上級ヲ定ム但シ一ヶ月間試ミテ後其力不適當ナレバ登級或ハ下級セシムルヲアルベシ

一 年ノ半ヨリ等級ニ加リタル生徒アラハ塾監局ニテ當人ノ姓名ト某級ニ加ヘタルノ旨ヲ記シタル書付ヲ渡スヘシ生徒ハコノ書付ヲ教師ニ示シテ其趣ヲ告クヘシ

一 生徒毎日ノ間ニ答テ得タル點數ト毎月ノ末每期ノ末ニ得タル試業ノ點數トヲ惣計シテ零ヨリ百マテニ割合ヲ立チ又出席缺席ノ數ヲ^(テ)

モ調ヘテ零ヨリ百マテニ割合ヲ立テ此兩様ノ割合ヲ差引シテ席順ヲ定メ每期ノ末ニ勤惰表ヲ出版ス可シ勤惰表ハ一冊ツ、生徒ノ證人ニ送テ其父兄ニ示スモノナリ

一 毎年八月アンニユアル、カタログ、ヲ出版スベシ生徒ノ名ヲ記スハイロハ、ノ順ニ從フ

一 此學校ニテ本等ノ業ヲ全ク終リタル者ヘハ成業ノ免狀ヲ與フベシ

一 事ナクシテ退學スル者ヘハ其等級ニ從テ卒業ノ證書ヲ與フベシ

等
外

カロザスの慶應義塾に對する影響

日本作文		チクテーションメント、テクライション (メ) 一週二度	同上	同上
日本作文		一週三度	同上	同上
ウイルソン 第五リートル		同上	同上	同上終ル
エレメンタリアルゼブラ		同上	同上	同上終ル
英國史		同上終ル	同上終ル	フル子ル (ヨ) ヒジカル地理書
アナリチカル文典		同上終ル	フアールス、シンタキス始ル	同上終ル
コムホジーションエンドデクラメーション		一週二度	同上	同上
日本作文		一週三度	同上	同上
ボープス、エッセー		同上	サイアンス、ラフ、ゴープルメント始ル	同上終ル
ロビンソン		同上		同上終ル
ハイアル、アリスメチック				同上終ル
カッケンボス			同上終ル	同上終ル
米 國 史			ガノット 究 理 書 始ル	

佛 國 史			ヒノック	本 等	初 年	年 數 四 年	毎 日 稽 古 三 時 間	同上
コムボジーション、エンド、デクラメーション			一週三度					同上
日本作文			一週二度					同上
ランベルト 人身究理書			同上終ル	第 二 期	第 一 期	第 二 期	第 三 期	ミツチエル 古代地理書
ロビンソン ニウユニベルシチー、アルゼブラ			同上終ル					ロビンソン セラメトリ
ハトク子ス ラテン文典			同上終ル					(ハー) ケク子ス ラテンリートル
(ケン) カッチボス			同上	第 二 年	第 一 期	第 二 期	第 三 期	同上終ル
コムボジーション、エントレトリッキ			同上					同上
コムボジーション、エンド、デクラメーション			同上					同上

<p>(ハー) ケク子(ス) ザル シールマン ロビンソン、アント、スフェリカル、トリゴ ノメトリ グーキ文典 同リードル ウイールソン 萬國史 コムポジション、エンド、デクライショ ン</p>	<p>ケミストリー 同上終ル フアウレル文典 同上終ル グレイ ボタニー 始ル 同上</p>	<p>同上終ル コニツキ、セツクシヨンス、エントアナ リチカル、ジラメトリ 同上終ル 同上終ル 同上</p>
<p>ウエーランド メタヒジツクス ロビンソン 測量航海術 パレ エビデンス、ヲフ、クリスチアニチー ガノット 究理書 コムボジション、エント、デクラメーシ ョン</p>	<p>同上終ル デフエレンシアル、エンド、イエテグラ ル、カルキユロス ウエーランド 脩身論 同上終ル 同上</p>	<p>ズラロジ、メテヲロロンジ 同上終ル 同上終ル 同上終ル ダナ ジラロジ 同上</p>
<p>第 三 年</p>	<p>第 二 期</p>	<p>第 三 期</p>
<p>第 一 期</p>	<p>第 二 期</p>	<p>第 三 期</p>
<p>第 四 年</p>		

第一期	第二期	第三期
コッピート ロジック ロビンソン アストロノミー 經濟論 ダナ ミチラロジ コムホジション、エンド、デクラメーション	同上終ル 同上終ル 同上終ル (パ)バ ナチュラルセラロジ 同上	ギーズ 文 明 史 キット プリンシプル ヒッチコック ゼラロジ、エンド、レリシラン ウール シー 萬 國 公 法 同上
大	尾	

○ 變 則 科

一、變則科ヲ學フ者ハ滿十七歳以上ニ限ル
 一、教授ノ法ハ專ラ讀方及譯ヲ覺ヘシムルヲ主旨トシ其時間ハ等級ニ由リ三時乃至二時間トス尤學期年限等ノ定リナシ其讀本ハ凡左ノ如シ

リードル 文典 地理書 究理書 歴史 脩身論 經濟書 等
 一、右條々ノ外大概正則科ノ規則ニ照準ス